

# 『韓国語学年報』投稿規定

(2014年4月現在)

## 1. 目的

本誌は、神田外語大学における研究、ならびに神田外語大学の研究活動と関連を有する研究の成果を公表することを通じて、広範な韓国語研究の発展に寄与しようとするものです。

## 2. 発行の時期

本誌は、年1回(4月)発行します。

## 3. 投稿資格

神田外語大学の専任教員、非常勤教員、学生、卒業生は、本誌への投稿資格を有します。その他、神田外語大学に所属しない韓国語学の研究者も投稿資格を有します。また、編集委員会が適当と認めた研究者にも、原稿執筆の依頼あるいは投稿の勧誘を行います。

## 4. 原稿の内容

投稿原稿は未公刊のものに限ります。投稿原稿の内容は以下の通りです。

- 1) 研究論文：オリジナルな知見の提供を含む学術論文。
- 2) 研究ノート：問題提起、事例報告、中間報告などの小論文。
- 3) 資料：韓国語に関する文献資料の紹介。
- 4) 書評：韓国語学に関する刊行物の論評。
- 5) 紹介：韓国語学に関する刊行物の紹介。
- 6) 動向：韓国語学に関する研究動向の紹介。
- 7) 翻訳：韓国語学に関する刊行物の翻訳。

## 5. 査読

投稿原稿は、編集委員会の委員が査読者となり審査し採録の可否を決定します。査読者と著者との連絡はすべて編集委員会を介して行います。

## 6. 投稿の手続き

投稿原稿は随時受け付けますが、できるだけ12月末までの投稿をお願いします。投稿に際しては、別紙の『『韓国語学年報』執筆要領』に従って作成した提出物一式を編集委員会に送付してください。提出物は原則として返却しません。

## 7. 採録決定後の修正

採録決定後，体裁や内容について編集委員会から著者に修正を求める（あるいは編集委員会の判断で体裁の細部を変更する）ことがあります。査読者および編集委員会から指示があった箇所を除き，採録決定後の改稿や修正は認めません。

8. 原稿の送付（送付する場合），問い合わせ先

〒261-0014 千葉県 千葉市 美浜区 若葉1-4-1  
神田外語大学韓国語学科 浜之上幸 気付  
hamanoue@kanda.kuis.ac.jp  
研究室 Tel : 043-273-2159  
自宅 Tel/Fax : 043-275-8110

## 『韓国語学年報』執筆要領

(2014年4月現在)

### 1. 論文原稿の様式について

\*ワープロ原稿のみ受け付ける。手書きのものは不可。

- 1) 使用言語：任意の言語。
- 2) 分量：原則として“論文”の場合 30 枚程度，“研究ノート”の場合 10 枚以上。
- 3) 用紙サイズ：A4。
- 4) マージン（余白）：上は 25 mm，左，右，下は 30 mm。
- 5) フォント：字体は，和文，ハングルの場合は明朝体，英文の場合は century など  
標準的な字体（明朝体など）を用いる。（ゴシックは不可）  
大きさは，本文は 12 ポイント，注と参考文献は 10 ポイントを用いる。
- 6) 本文の 1 行の文字数：全角 38 文字。
- 7) 本文の 1 ページの行数：和文，ハングルの場合は 38 行，英文の場合は 49 行（上記のマージンとフォントの大きさではこの行数が適当）。
- 8) ページ番号：打ち出さず，裏面に鉛筆で薄く記入する。
- 9) 文字方向：原則として横書きとする。縦書きの場合には，2 段組とする。
- 10) ヘッダー，フッター：付けない。
- 11) タイトルページ（論文の第 1 ページ目）：論文タイトル，氏名，所属をこの順番に 1 行ずつ中央に寄せて書く。論文タイトルは太字（ボールド）にし，上に空行を入れずに 1 行目から書く。論文タイトルと氏名の間は 1 行あける。所属の後，2 行あけてから，本文を始める。（別紙の“タイトルページ見本”を参照のこと）
- 12) 注：ページ毎の脚注は付けず，本文の最後につける。なお，本文中の注番号は上付き半角文字を用いて，<sup>1)</sup> のようにする。

### 2. 要旨について

- 1) 使用言語：論文での使用言語以外の任意の言語(アジアの言語でも可)。
- 2) 様式：基本的に上の“1. 論文の原稿様式について”に準ずる。
- 3) 分量：15 - 20 行程度。
- 4) 論文タイトル，氏名，所属を必ずつける。（論文本体のタイトルページと同形式）

### 3. 提出物について

- 1) ハードコピー（プリントアウトしたもの）：論文原稿，要旨各 1 部

- 2) 記憶媒体 (CD, USB, フロッピーディスクなど) : 論文原稿, 要旨をそれぞれ別のファイルで, ワードプロファイル形式で保存したもの. なお, ハングル専用環境の原稿の場合は, 「アレア・ハングル」でも可.
- 3) なお, 1), 2) のかわりに, 浜之上宛ての e-mail の添付ファイルでの送付も可とする. アドレスは, [hamanoue@kanda.kuis.ac.jp](mailto:hamanoue@kanda.kuis.ac.jp)

## タイトルページ見本

↓タイトル (ボードで1行目から), 名前, 所属はすべて中央寄せで  
現代朝鮮語の「目撃法」語尾雑考

← 1行開け

浜之上幸  
神田外語大学

← 2行開け

0. はじめに

←本文開始

菅野(1988:1034)によれば, 現代朝鮮語の目撃法は, 直説法, 推量法, 意志法, 命令法, 勧誘法と共に, 文法範疇としての法(mood)を構成し, さらに, この法は, 待遇法, 叙述/疑問, 詠嘆-婉曲-確言-確認, という3つの文法範疇と共に終止形で一つの形に融合すると述べられている.<sup>1)</sup>このように, 目撃法は……………

## 注、参考文献見本

《註》

1) 目撃法が含まれる終止形語尾を菅野(1988:1024)の表から抜粋して示しておく: ……  
……

《参考文献》

神尾昭雄(1990)『情報のなわ張り理論』大修館書店

権在淑(1992)「現代朝鮮語の用言の接続形-ㄴㄷについて」『Lingua』3 上智大学一般外国語

権在淑(1994a)「現代朝鮮語の接続形Ⅲ(-아/-어)について」『Lingua』5 上智大学一般外国語

権在淑(1994b)「現代韓国語の接続形Ⅲ-ㄷについて」『朝鮮学報』152

菅野裕臣他編(1988)『コスモス朝和辞典』白水社

菅野裕臣(1988)「文法概説」菅野裕臣他編所収

Anderson, L. B. (1986) "Evidentials, Paths of Change, and Mental Maps: Typologically Regular Asymmetries." In Chafe et al. (eds.).

Anderson, L. B. (1982) "The 'Perfect' as a Universal and as a Language-Particular Category." In P. J. Hopper (ed.).

Bondarko, A. V. (1991) *Functional Grammar: A Field Approach*. New York: John Benjamins.

- Botne, R. (1997) "Evidentiality and Epistemic Modality in Lega." *Studies in Language* 21:3.
- Chafe, W. L. and J. Nichols (eds.) (1986) *Evidentiality: The Linguistic Coding of Epistemology*. Norwood, N. J. : Ablex.